

小特集にあたって

色材協会 中部支部長
高橋 鈺次

色材協会は今年、創立90周年を迎えます。中部支部の設立は1961（昭和36）年4月であり、協会の支部としては関東および関西支部の設立からは約20年遅れて活動を開始しました。本小特集の話題からは少し外れますが、まず中部地区における色材技術とのかかわりについて、中部支部設立との関連から触れます。

「ナゴヤシブハツカイシユクシゴハツテンライノル」—これは中部支部設立の発会式に、当時の藤沢乙三会長から寄せられた祝電の内容です。最近、ある事情から中部支部の過去の資料を整理することになり、この電報は支部設立前後の資料とともに古いファイルに綴じられていました。電報の台紙には鮮やかな色彩が色褪せることなく残り、支部が発足した関係者の喜びが伝わってきます。1997年発行の色材協会誌、創立70周年記念増刊号「色材協会70年のあゆみ」によれば、昭和20年代の終わり頃から関西支部の行事として毎年7月に名古屋市において、講演会や見学会が開催されてきたとのこと。中部支部の最初の行事である講演会は1961年9月に開催され、以下のように自動車の塗装2件がいずれも海外の話題というのが当時の事情を物語っています。

「低温焼付メラミン塗料について」	名古屋塗料(株)	須賀泰彰
「建築用塗料について」	鈴鹿塗料(株)	小林博次
「金属用水溶性塗料について」	日本ペイント(株)	田代大三郎
「欧米における自動車の塗装」	関西ペイント(株)	塩田良一
「米国自動車工業における塗装設備および器具について」	松岡機器(株)	菊池村主

また、中部支部設立に先立つ1958（昭和33）年4月には中部塗装技術研究会が発足しています。この研究会について1987年発行の名古屋市工業研究所創立50周年記念誌に次のようにあります—「名古屋を中心とした中部地区は機械、自動車、電機、鉄道車輛などの工業が盛んであり、これらの工業製品の塗装にたずさわる企業も多数存在する。当研究会は昭和33年、当時これらの工業の塗装関係者の間から塗装に関する技術の向上をお互いに協力して進め、同時に同業者としての連帯感を強めて業界の発展をはかりたいという機運が強くなったのを機会に、当所が世話人となって発足し、現在に至っています」。この状況は現在も大きくは変わることなく、当地域で生産される多くの工業製品を、美しく、耐久性のある塗膜で保護することが求められています。前述した中部支部の過去の資料には中部塗装技術研究会の1961年の会員名簿もあり、賛助会員、正会員などあわせて139社となっています。この中には、現在は世界的な大企業に成長した機械や輸送用機器などの企業がいくつかあり、いずれもすでに研究会は退会していますが、研究会の活動がそれら企業の発展に寄与したものと考えています。色材協会中部支部と中部塗装技術研究会はいずれも活動の拠点が名古屋市工業研究所にあることもあって、講演会や見学会などの事業は当初より共催もしくは協賛で実施していて、この関係は現在も続いています。

さて、前置きが随分と長くなりました。中部支部の拠点となる名古屋地区周辺は、自動車をはじめとする輸送用機械の生産が盛んで、最近では国産初のジェット旅客機の開発で注目を集めています。経済産業省の平成26年工業統計表産業編（概要版）によると、愛知県における輸送用機械の製造品出荷額等は23兆5千億円で全国シェアの39%、愛知県の製造業全体の54%を占めています。一方、航空宇宙産業の生産額は全国でも約2兆円ですが今後の成長が期待されています。これらの工業製品の多くには、何らかの形で色材が使用されていて、中部地区で盛んな「ものづくり」の裏には、これを色材技術で支える企業の存在があります。しかし、残念ながら諸般の事情により今回は自社の色材技術を公表することができなかった企業も多数あるものと思います。このような状況の中、本特集につきまして、ご執筆いただきました先生方、また、ご協力いただきました関係者の方々に厚くお礼申し上げます。また、本誌2015年3月号の小特集「酸化チタンをめぐる最近の話題」には、今回の特集と重なる内容がありますので、そちらもご覧いただければ幸いです。